

「水曜サロン with 赤堀会長」第6期 第12回(通算87回)

子どもを「鑄型にはめない」教育の大切さ(生徒も登壇!)

1. 内容

○ドルトンプランの特徴

- ・「鑄型」とは、時間割、教室、教室など、学校で当たり前にあるもの。
- ・2つの原理→主体性・創造性を重視した「学習者中心」の教育
自由：生徒が自分のペースで学びを深める
協働：他者と協力しながら創発を生む
- ・三つの柱
ハウス：異学年のコミュニティが学校生活のベース。異学年を見る先生が担任になる。
アサインメント：教科学習におけるシラバスの詳しいもの。全教科全単元で準備。アサインメントに従って生徒自身が学習計画を立てる。定期考査は行わない。
ラボラトリー：基礎ラボ(地域探索・キャリア探索等)、探究ラボ(協働的なテーマラボ+個別最適なオフィスアワー)、STEAMラボ(高校生のみ)
- ・すべての子どもは生まれながらにして有能な学び手である。子どもは一人ひとり違う。

○授業の形態

- ・先生が来てくれて教えてくれるという受け身ではなく、生徒が先生の部屋に学びを取りに行く。

○ICTの活用

- ・BYODでインターネットやアプリケーションを自由に使用
- ・社会に出た時に大人が普通に使っているアプリを使う。学校のために特別に用意されたものは使わない。

○生徒(高等部2年生)からの発表

- ・「やりたいこと」を「やりきれない」力が求められている。
- ・二期生として入学し、鑄型にはめられないことが最初はきつかった。
- ・プロジェクトマップ甲子園への参加。
- ・さまざまな場面での「種蒔き」がすごい学校。国語の授業でプロジェクトマップに感動。
- ・型にハマる必要などない。好きなことを、好きなだけ。これは高校生にも社会にも大切。

○学びの成果～非認知能力の成長～

- ・自己効力感、イノベーション、協働性などは全員につく、一方、実行力、決断力、創造性は生徒によって波がある。
- ・共感・傾聴力が上がることで他の力も高まる。

2. 所感

最初に「ドルトンプラン」について詳しくご説明いただきました。まさに今の日本に求められる学校教育の在り方だと感じました。一方で、先生の側からすると、放任する勇気と見守り育む包容力と、新たな刺激を与え続けられる力量が求められ、多くの公立学校ですぐに同じように実践することは難しいだろうと思いました。しかし、向かうべき姿がここにあるように思います。「より安心、安全に失敗ができる空間が学校である」「失敗することが共感・傾聴力を伸ばす」というお話は、ぜひすべ

ての学校で意識していただけたらと思うことでした。社会人になってから「失敗を恐れずにチャレンジせよ」と言われても、そういう経験がなければ一歩を踏み出すことが難しいと思います。変化のスピードが速い時代に、用意周到な計画などなかなかできるものではなく、失敗を恐れずにまず動いてみる、ということも大事だと感じました。

さまざまな刺激のあるお話の中で「○○ for School」のような学校用に用意されたアプリは使わない、大人が使っているものをそのまま使う、というお話に最もハッとさせられました。細かいこだわりなのかもしれませんが、「学校とは何のためにあるのか」ということを再確認させられるお話でした。

今回、水曜サロンとして初めて生徒さんにも登場いただき、話をさせていただきました。「特別な生徒ではない」と先生は紹介されていましたが、しっかりと組み立てられた堂々としたプレゼンテーションで、ドルトンプランでこういう人材が育っていくんだ、ということがしっかりと感じられました。

安居先生、紙谷さん、貴重なお話をありがとうございました。